失われゆく延喜式内社を求めて【番外篇】　青年版国民栄誉賞〝人間力大賞〟受賞者

阿波忌部氏直系 三木信夫氏に聞く 知られざる践祚大嘗祭の秘儀〝麁服神事〟とは何か〈前篇〉

オキタリュウイチ

天皇の即位において、一度だけ行なわれる最重要儀式である「践祚大嘗祭」。この神事は天皇家の秘儀であり、その内容に関しては一般に公にされることなくその伝統が受け継がれてきました。今号、次号と2回にわたり、古来より大嘗祭を執り行ってきた阿波忌部氏の末裔である三木信夫氏に、大嘗祭の意味とその最大の神具である「麁服」とは何かをお聞きします。

私たちの祖先である三木忌部氏は麁服を調進し、上古以来、朝廷と深いつながりをもってきました。

オキタ／さて、この三木家（忌部氏）が古来より調進してきた麁服がまさに今回の主たるテーマになりますが、そもそも麁服とは一体何なのか、基本的なことをお教えいただけますか。

三木／麁服という言葉は漢字で書くと難しいのですが、古語、神語では〝阿良多倍〟と書きました。阿波忌部直系氏人が践祚大嘗祭のときにのみ調進する大麻の反物を指します。天皇が即位するために必要な祭祀具です。

オキタ／ある一時代の天皇が崩御され次代の天皇が立たれる際に、即位の礼の後に行う最初の新嘗祭のことを践祚大嘗祭といいますね。このことはもちろん多くの方がご存知でしょう。この大嘗祭でメインで用いられるものが、悠紀殿・主基殿にて供饌される新穀と、この麁服と呼ばれるものであり、これは天皇即位において欠かせない極めて重要なものなのですね。

ところで、多くの大嘗祭関連の文献で麁服について、ごく簡単にはふれているものの、その詳細が書かれることはほとんどありません。それはなぜでしょうか、不思議なことです。

三木／なぜかというと、大嘗祭およびそこで用いられる麁服は、ずっと気易く話題にできない重いテーマだったのです。大嘗祭自体は皇位を継承する秘儀で、天皇が皇位に対して神様から力を頂く最も重要な儀式であり、しかもその儀式の中でも特に中心となる麁服を使った秘儀のその内容を一般の人が気軽に語るべきではないという雰囲気が昔からありました。

大嘗祭の中で、麁服がどのように使用されるか現在でも公表されていない為、表立って書きづらい状況であろうと思います。専門の学者が書いたとしても、ほんの1行か2行にとどめる事しか出来なかったのです。

オキタ／大嘗祭を行なわなかった天皇は〝半帝〟と言われていますね。南北朝時代も、即位がはっきりしていなかった天皇がいたが、三木家に麁服を調進した古文書が残っていたので、宮内庁でも即位したという事実が確認出来た、という話を聞きました。それは、大嘗祭を行なわないと即位出来ないというようにも取れると、麁服について研究熱心な方々は説明しています。

国指定重要文化財である三木家（徳島県美馬市木屋平）新緑映える中庭にて。三木家第 28 代当主、三木信夫さんとオキタリュウイチさん。

三木信夫（みき・のぶお）
昭和 11（1936）年、徳島県美馬市、阿波忌部氏直系の三木家に生まれる。関西学院大学法学部卒業。現在、「NPO 法人全国重文民家の集い」代表幹事。国重要文化財、三木家住宅の管理者。三木家は阿波忌部（いんべ）氏直系としての忌部氏であって、上古以来、歴代の践祚大嘗祭に、御殿人（みあらかんど）として「麁服（あらたえ）」を調進して朝廷と深いつながりを持っていた。麁服調進は、南北朝動乱に至り、以降中断していたが、復活して大正・昭和の大嘗祭にその任を果している。平成 2 年の大嘗祭は、旧木屋平村・山川町の大勢の方々の物心両面での支援と協力により「麁服」調進の任を果した。

オキタリュウイチ　クリエイティブディレクター
昭和 51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで 17 億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

なぜアラタエは秘められているのか

オキタ／三木さんは阿波忌部の直系のお生まれであり、ご自宅（三木家）も徳島県内でも最も古い江戸時代初期の民家で国指定の重要文化財として有名ですが、まずは国史における〝忌部〟とは一体どんな存在かお話いただけますか。

三木／〝忌部〟とは、穢れを避けて、神聖な仕事に従事する集団の意です。祭祀族であり、農民や手職を持つ工人の産業技術集団を率いた氏族のことでして、ヤマト王朝では中臣氏（のちの藤原家）と並ぶ古代氏族の大族であり、中臣氏と朝廷の神祭に奉仕、宗家は天孫降臨の際にニニギノミコトと共に降りて来た「天太玉命」の子孫です。

忌という文字は、いまではマイナスイメージが強いですが、それは仏教が導入されて以降の解釈であり、古語においては穢れを避けて身を清め慎むというプラスの意味だったのです。私たち三木家は、三ツ木というこの土地の地名にちなむ名字を帯びていますが、元来、忌部姓が本姓です。

「なぜ、麁服がそんなに即位にとって大事なのか？」「なぜ、阿波忌部以外は麁服をつくる事が出来ないのか？」という素朴な疑問も沸いてきます。

麁服は、最重要機密であったという特性から、ほとんど認知されていません。次世代にその重要性を伝えていくためにも、徐々に明らかにされるべきテーマではないでしょうか。

践祚大嘗祭と大麻

オキタ／続いて、麁服とこの阿波国（徳島）および阿波忌部氏とのつながりについてお話いただけますか。

三木／大嘗祭の皇位継承の秘儀に使用される麁服は古来より、阿波の国の直系忌部氏が織りたるものを用いよ、とされています。『古語拾遺』にも、「祭祠官太玉命の一族として阿波国忌部の直系が御殿人として関わる事」と記載があります。御殿人は、当初直系の阿波国忌部氏が占いで選定していましたが、すでに鎌倉時代からは御殿人の家筋は三木忌部氏などに固定されております。

オキタ／大嘗祭における阿波忌部氏の役割とはどんなものなのでしょうか。また御殿人とは具体的にどのような役職だったのでしょうか。

三木／『古語拾遺』や『延喜式』に記載されるところでは、大嘗祭において阿波忌部には、麁服を調進すること、「由加物」といわれるお供え物を出すこと、この二つの役割があったようです。大正時代以降は、後者の役割は無くなりましたが。

御殿人というのは、天皇の即位後、大嘗祭でのみ使用する麁服の制作を統括し、大嘗宮へ供納し、最後に天皇が使うところまで取り扱う事の出来る

大嘗祭では何が執り行われているのか

オキタ／大嘗祭の詳細については一般にほとんど公開されていませんので、謎に満ちたもので非常に気になるのですが、その内容はどういったものなのでしょうか。

三木／大嘗祭の中心行事となるのが、悠紀殿・主基殿の供饌の儀です。これは、麁服、縑服を神御衣として神座にまつり、天皇陛下が悠紀・主基の二つの斎田の新穀を以って、天照大神および天神地祇を奉祭され、自らも食する儀式と聞いております。天皇家の由来が凝縮された神事であるといえます。

オキタ／麁服と縑服の意味とその関係性はどういったものでしょうか。

三木／よく並行して書かれますが、その二つの存在は一対ではないと考えます。麁服が麻の織物で阿波国の忌部氏が必ず製作しなければならないのに対して、縑服は絹の織物ですが、『延喜式』によると、神官の神服部によって三河の国から調達されました。

　今は途絶えましたので、現在はその地域の人々が製作されています。三河の地で絹の山繭が取れたため、製糸した糸をもって10人の神官が京都に来て、北の祭斎場に織殿を建てて織った。その後、織り上がったものはそのまま他のお供え物と一緒に北の齋祭場で保管されたという記録があります。

オキタ／伊勢神宮でも、神札のことを「神宮大麻」と言いますね。神道において麻とは古来より、神霊が依り代とされる、御神体のような位置付けであったと思われます。

三木／大嘗祭における麁服は、神御衣として祀る最も重要な威霊を体得される為に神御衣と一緒に置かれるものです。調進される麁服は神祇官で預かりますが、その後どういうふうに扱ったかが平安時代の『延喜式巻第七』の践祚大嘗祭の項に載っています。「阿波国忌部織る所の麁妙服あらかじめ神祇官に於いて云々……」というように、他の祭祀具と比較していかに特別に扱われたかが詳細に書かれています。

オキタ／縑服はお供え物的な側面がある一方、麁服は格が全く違うようです。いろいろな地域からお供え物、祭祀具が集まってくると思いますが、そのなかでも麁服は別格だったという事でしょうか。

三木／麁服はあくまでも皇室から依頼されて始めてつくるもので、こちらから献上品として持っていくようなものではありません。

　昔は〝太政官〟と〝神祇官〟、太政官はいわばいまの内閣に当たりますが、神祇官は天津神・国津神の祭祀や大嘗祭等をつかさどる所でした。神祇官が麁服作りを依頼するために太政官より公文書が国司に送付され、麁服の制作統括者である忌部の御殿人に依頼しました。御殿人とは階位ではなく別格であり、天皇に直接会える資格を有していたと思われます。

オキタ／麁服と縑服は古来どのように使われたのでしょうか。

三木／大嘗祭の儀式の詳細は本来すべて口伝です。

　ただ、本来は記録してはいけないけれども祭祀に携わった祭祠官が極秘に記録していたものに基づいて古来の祭祀はこうだったのではないかという資料をまとめた人が奈良に居ました。一時期、応仁の乱以来、口伝が途切れた期間が200年ほどありましたが、その人の資料に基づいて江戸時代に復活しているんです。

　その資料によると、北側神座の東側に麁服を、その西側に縑服を置くと決まっていたようです。麁服は大嘗祭終了後は、焼くか土に埋められ、一切他には流用する事はありません。

時代を超えて守り抜かれた阿波忌部の伝統

オキタ／このように宮中でも扱いが別格であった麁服ですが、仮に大嘗祭において、もし麁服が使用されなかったら、どうなってしまうとお考えですか。

三木／実は、実際に麁服を用いなかった天皇も歴史上に多数存在しました。三木家では、大嘗祭で麁服をもちいなかった天皇は「半帝」と言い伝えられております。

オキタ／麁服は天皇即位に欠かせないものである事がよくわかりました。そしてまた、それを作れるのは阿波忌部しかいない。そういう前提のなかで阿波忌部も祭祀的な部分では重視され、地位を守られてきたのでしょうか。

三木／じつは、古代から中央忌部は中臣氏と勢力を争ったが、大化の改新以降、政治的手腕の高かった中臣氏に次第に権力を奪われ、押さえつけられていった歴史があります。それ以前は逆に、忌部氏が主導権を握っていたのです。

　中臣氏はやがて藤原氏として、時代の変化に対応しながら勢力を伸ばしていきますが、忌部氏は身分の人です。ここは、中央忌部も、中臣氏もタッチする事は出来ません。阿波まで迎えに来た勅使と同道して都へ赴き、到着した麁服はさまざまな祭祀具とは別の部屋で特別に神祇官により保管されます。大嘗祭の当日、御殿人が神祇官より受け取り阿波忌部4人と大嘗宮へ麁服を供納します。

オキタ／この木屋平三ツ木という場所ですが、この土地にも意味があるのでしょうか。

三木／その昔、直系の忌部氏は良品な大麻の育つ風土の地を探して僻陬の地を開拓し、当初は三木山（みつぎやま）と称し、後に三木山（みきやま）と呼ばれた忌部郷の地、後麻殖郡となり良品な大麻の育つ最適の地でした。弥生から古墳時代前期、吉野川上流にかけての地を忌部が開拓していったという史実があります。

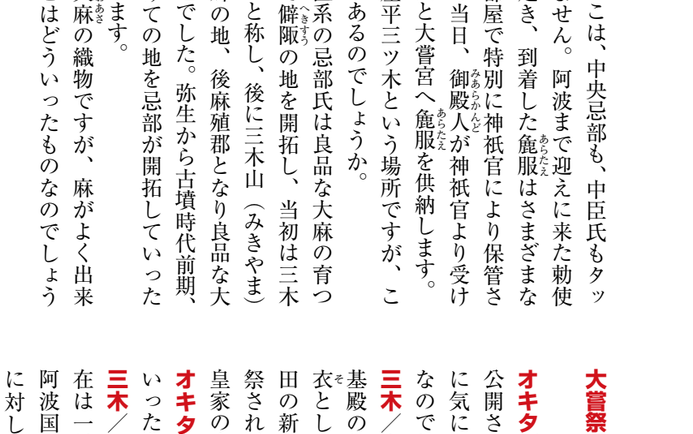
オキタ／麁服は大麻の織物ですが、麻がよく出来る理想的な条件とはどういったものなのでしょうか。

三木／この木屋平の三木山は、麻植郡でも風土的に一番よく麻が出来る場所に当たります。麻がよく育つということは、海抜が少なくとも500から700ぐらいのところ（気温が3～5度低い）、かつ西日が当たらず、朝霧の出るところ。茎が人間の小指位しか太らないところ。同一場所で連作が出来ないので一定の面積がある土地とされます。そういう限定された条件に合致する場所をうまく見つけたように思いますね。

　平成の大嘗祭に際してうちの畑で麻を作ったとき、こんなところで本当に育つんですかね……と専門の人たちが最初は疑っていましたが、いざ収穫の場面になると見たこともない立派な麻が育っていたので、感動していました。（笑）

蔵書として古くから保管されてきた『延喜式』の原本をひもとく三木さん。豊富な資料とともに、これまで語られることのなかった秘話をお話しいただく。

三木家の応接間にて。座敷の奥には、代々三木家の主人しか入ることを許されない「天狗の間」という秘密の部屋があり、古より三木家に伝わる“御神体”（太玉）が保管されているという。



故郷の徳島で、延喜式内社を中心に古社を取材するフィールドワークを重ねているオキタリュウイチさん。阿波忌部に関わる研究テーマもまた最大の関心事である。

三木家での麻栽培の様子。成長した麻はゆうに2メートルを超え、鮮やかな緑色に照り輝き、生き生きと繁る。

祭祀（まつりごと）も政治（まつりごと）も同義という事が理解できず古代祭祀を敬虔に守り続け、時代の変化に対応することが出来ず衰退していきます。伝統に固執し固陋化していったのも原因だったでしょう。

そうして、中央忌部は表の歴史から姿を消していきます。

一方で、いつの時代も中央の権力者は、阿波忌部を特別に扱い大事にしていたようです。ある部分は規制しても、麁服だけは常に依頼があり大切に扱われております。

中臣氏は元来忌部氏の仕事であった部分の祭祀も中臣氏の仕事として取り込んでいき、忌部氏を追いやっていきますが、彼らも麁服だけは、素直に受け入れてるんですよ。数ある忌部の祭祀の中でも、これだけは絶やせない残すべきものとして扱われたのが麁服だった。天皇と親戚関係を結び勢力を拡大していった中臣氏にとっても、麁服がないと天皇になれないという事象は無視出来ない重要な事柄だったのです。

オキタ／時代の波に翻弄され、幾度も危機的局面に晒されながらも、その価値を知る一部の人々によって辛うじて守られてきた。麁服の存在が今でも保持されていることは、この国にとって大事なことであり、私たち一人一人がその真意を問う必要がありますね。

（インタビューより編集構成　石黒壮明）

※次回は、大嘗祭および麁服の歴史と忌部氏のルーツについて、さらに詳しく迫ります。

三木家から通りを挟んだ土地は、麁服（あらたえ）を栽培する麻畑である。通常は芝地になっている。

大嘗祭に際して麻を栽培する時期になると、全面が柵で囲われ、聖域となる。（平成の大嘗祭に向けた麻作りの様子）

平成の大嘗祭に向けた、麁服（あらたえ）制作の様子。巫女装束を身につけた織女が、織り機を用いて反物のかたちにしていく。

平成の大嘗祭に使用した麁服（あらたえ）、および神具である麁服を木屋平から大嘗宮へと運ぶために用いられる櫃（ひつ）。